

## 教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	関西学院大学	申請分野(系)	人社系
教育プログラムの名称	国際化社会に貢献する心理科学実践家の養成		
主たる研究科・専攻名	文学研究科・総合心理学専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名)			
取 組 実 施 担 当 者	(代表者) 八木 昭宏		

### [教育プログラムの概要]

#### <目的>

本学では、研究の高度化および優れた研究者の養成と、高度な専門的職業人の養成という二本柱を据え、先端的科学研究の推進と、社会のニーズに応え国際的に活躍できる専門家の養成を重視してきた。前期課程を含む今回の提案プログラムでは、従来の基本方針に基づきつつ、教育・研究体制の質的・量的な拡大を図る。プログラムの具体的な目的は、実証的な心理科学の成果に基づき、「人と物」および「人と人」の、より良い心理的な関係を創造できる人材、すなわち**心理科学実践家の養成**である。これまでのイニシアティブプログラムで培ってきた後期課程における大学・研究機関での教員・研究者養成に加え、「人と物」の分野では、企業の企画・研究開発部門におけるプロデューサーやプロジェクトリーダーとして、人の心に関わる製品やシステムの開発・心理評価に関わる研究者を育成する。また、「人と人」の分野では、学校園臨床や医療の現場におけるリーダーとして、問題把握、コンサルテーション、教員や医師を含む専門家と共同した問題解決ができる研究者を育成する。

#### <教育内容>

実証的心理科学の基礎知識として、「研究演習」・「特殊講義」で、工学心理学、認知心理学、学習心理学、臨床心理学、教育心理学、発達心理学、社会心理学、知覚心理学、生理心理学、脳神経科学、異文化心理学などに関する最先端研究成果を習得する。また、行動測定、生理反応計測、行動観察、質問紙作成、数理解析などの基本的スキルは「特殊実験」・「特殊研究」などのカリキュラムを通じて獲得する。さらに従来の基礎重視の姿勢に加えて、実習現場のスーパービジョンを強化し、産業、教育、医療現場における「実習」を通して、高度な実践力とコンサルテーションを習得する。

#### <教員組織と教育研究環境>

総合心理学専攻は平成21年度、心理学領域と教育心理学領域とを統合して「心理科学領域」を作り、かつ新たに4名の教員の増員により教員組織の強化を行った。

研究環境に関しては、20室に及ぶ遮音実験室、2室のヴァーチャルリアリティ実験室、6室の行動観察室、8室の動物実験室などを有しており、世界でも最高水準の施設と最新の計測解析機器を利用できる。加えて共同研究への参加や、教育・臨床現場での実習を体験できる環境も整っている。さらに、学位論文作成に際しては副指導教員制度により複数の教員の指導の下で博士論文を仕上げる。また、大学院生は共同研究室で机を並べ、上級生である研究員やPDの支援も受けながら実験や行動観察等の技術を習得するとともに、専門が異なる大学院生同士の議論を通じて幅広い興味・知識を身につけることができる。

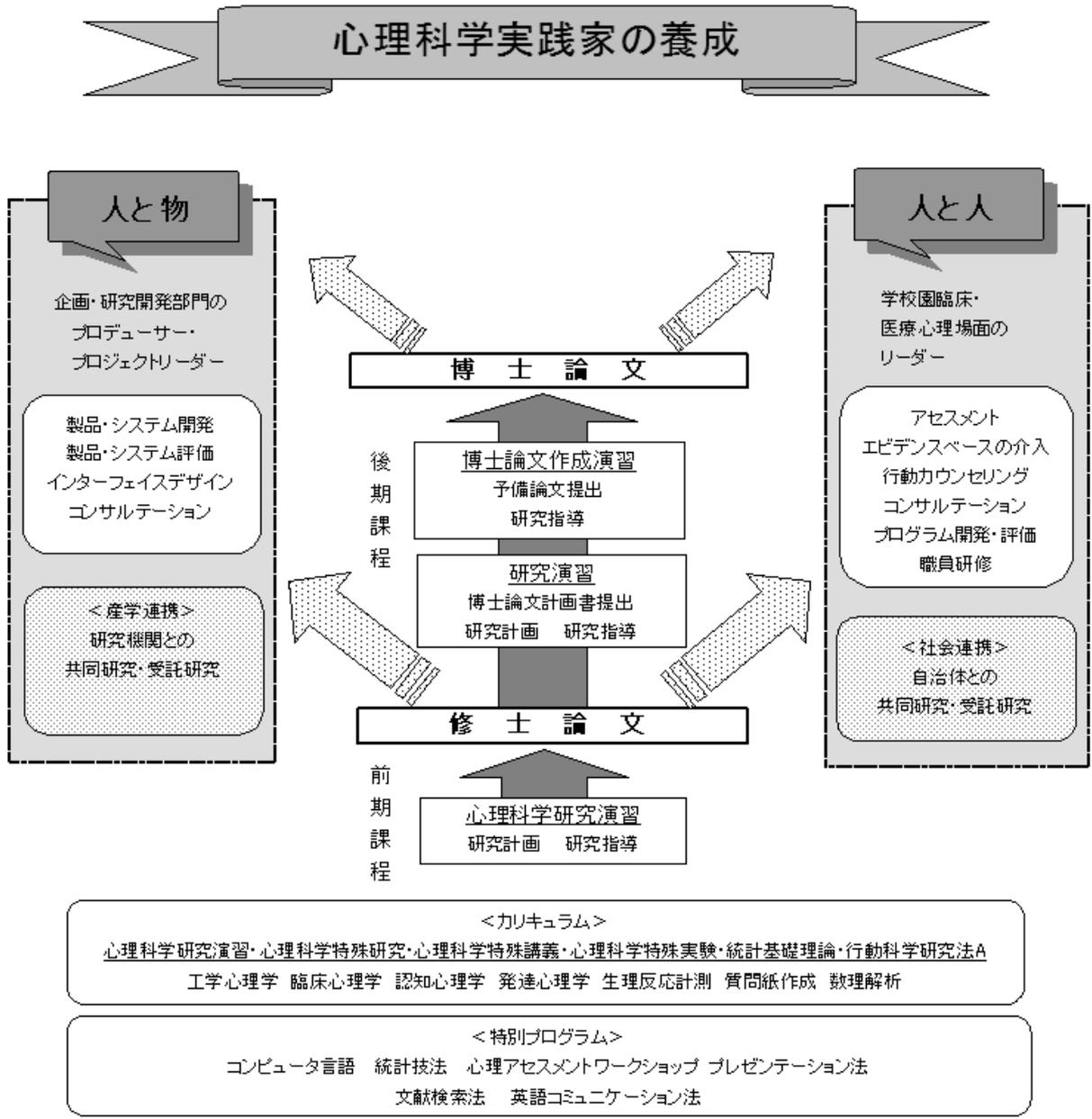
#### <国際化>

教員の多くが海外の教育・研究機関の経験者であり、また国際学術雑誌のエディタや国際会議の主催、シンポジウムの企画等も経験しており、大学院生の国際的な活動を指導できる。国際的な研究や実践活動の強化のため、毎年、海外から客員教授や講演者を招待して英語での授業や討議を行い、サブプログラムとして、英語でのプレゼンテーションのためにnative speakerによる英語の講習会を頻繁に開講する。特に今回のプログラムでは、新たに英語native speakerの教員を雇用し、研究室での日常的な英語での会話と、各ゼミでの英語での討議の訓練を行う。さらに優秀な大学院生を海外の研究機関等に派遣して海外で対等に活動するための能力を獲得させる。

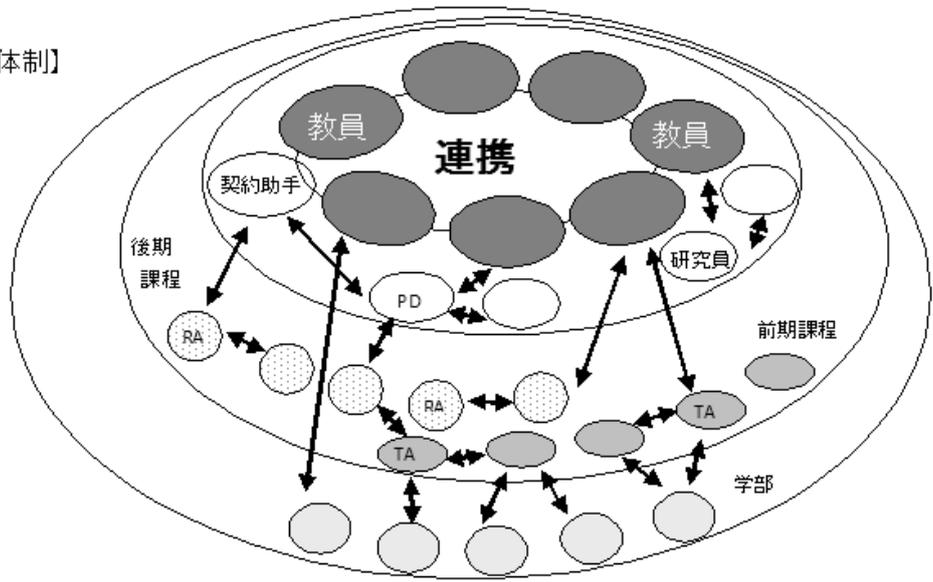
#### <公表>

大学院生は、これまで研究成果を国内外の学術誌に積極的に発表してきたが、引き続き国際誌や国際学会で発表することを奨励し支援する。これまでも前期課程を含む多くの大学院生が海外の学会へ出かけており、一層の強化を図る。また、本プログラムの成果による博士学位論文を、専門領域の異なる読者にも分かりやすく紹介するリブレットをシリーズで出版し、他大学や他の機関へ配布する。

履修プロセスの概念図 (履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。)



【専攻体制】



<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、「実証的研究手法を持ち合わせた高度専門職業人の育成」という人材養成目的が明示され、心理学の基礎知識に加えて社会連携を重視し、体系的な教育課程を編成するとともに、それを実現するための体制を整備するなど、これまでの教育研究に関する実績をふまえて、実質化に取り組んでいる点は高く評価できる。ただし、博士の学位授与を円滑に行うための方策について、一層の工夫が求められる。

教育プログラムについては、心理学領域における長年の蓄積を踏まえて、これまでの心理学を「人と物」「人と人」という概念で整理し、他領域との連携を通して現代社会に開かれた心理学実践家を養成するという目的の下、心理学を現代社会の具体的な活動と向き合わせながら、新たな視点で活性化を図ろうとしている点は優れている。また、「社会連携・産学連携」についても具体的進展性が見られ、基礎重視に加えて高度な実践力を習得させようとする取組は評価できるが、多様な社会的ニーズに対応するため、他分野との融合について更なる具体的な仕組みの検討が望まれる。大学全体における本教育プログラムの位置づけも明示されており、これまでの国際的研究及び教育を踏まえた実現性あるプログラムとなっている。